

ロシア語の類型学的考察¹

はじめに

§1 クリモフ等の提唱するいわゆる「内容的類型学」*contentive typology* は、主述関係を言語構造の中心に据え、その類別によって各レベルの体系が原則として規定される、と考えている。この類型学はいまようやくその輪郭を現わしたところであって、細部にいたってはまだ十分に論じつくされてはいない。

この主述関係のありようの相違によって言語はいわゆる「活格言語」*active languages*、「能格言語」*ergative languages* および「主格言語（よりの確には対格言語というべきであろう）」*nominative (accusative) languages* 等に分けられ、またこれら相互のあいだには一定の歴史的な連関性が認められるという。これ以外の類型については、まだ総合的な意味づけはなされていないのが現状であるように思われる。とくにバントゥー諸語にその典型的な例がみいだされるいわゆる「多分類言語」の類型学的特徴、およびこれと密接な関連を有するといわれる、いわゆる活格言語との関係などについても、いまだ明確な理論づけはなされていないように思われる²。

§2 活格言語と能格言語、活格言語と対格言語のあいだに歴史的な連関性が存在するというのが類型学の結論であるならば³、たとえばイラン語派に属する種々の言語のように本来印欧語に属し、したがってすでに対格言語の段階にあると思われるものが、現象的に強い能格言語の性格を呈する場合には、これをどう位置づけるかという問題が生ずるであろう。

印欧語は、その古い時代に活格言語の類型に所属していたとみられる多くの事実が認められるところから、これは活格言語から今日の対格言語に発展したと考えられている⁴。もしそうとするならばイラン語派のみが独自の発展をとげて活格言語から能格言語に転化したという可能性も、あるいは存在するかもしれない。しかしこの語派に属する言語の能格言語的性格が不徹底であり、基本的には対格言語類型の特徴を備えていることからすれば、このような可能性はさほど高いとはいえない。

¹『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂 1990年9月1日 709-721頁。

²クリモフは多分類言語が、活格言語の初期にある言語とくに著しい相関点をもつという。G. A. Klimov (1977), *Tipologija jazykov aktivnogo stroja*, (Moskva), pp. 290-293.

³cf. G. A. Klimov (1973), *Očerok obščej teorii ergativnosti*, (Moskva), pp. 235-253.

⁴G. A. Klimov (1977), pp. 207-216. この問題を体系的に扱ったものに T. V. Gamkrelidze, Vjach. Vs. Ivanov (1984), *Indoevropskij jazyk i indoevropejcy*, I-II. (Tbilisi) の中の第5章 *Praindoevropskij kak jazyk aktivnoj tipologii*, I, pp. 267-319 がある。

§3 このように考えればイラン語派における能格言語的現象は、たとえば他の能格言語との接触あるいは混交、もしくは基層をなす能格言語の影響などによる2次的なものであるということになるかもしれない⁵。

しかし一方言語というものが外来の影響を必然性もなく取り入れ、しかもこれになんらの構造的意味をも付与することなく自らのうちに包摂するというのは、言語を一の構造体であるとする現代言語学の基本的な仮定に背くことになる。言語はたとえ当初は夾雑物にすぎないものでも、これに一定の構造的意味を付与しようとするのであって、意味づけを与えられない現象はやがて消滅の道を辿るほかはないと考えられる。したがってイラン語派において能格言語的現象がどのような構造的意味を付与せられているのか、また能格言語的現象が発生したことによってこれらの言語における構造的原理に変化が生じたか否か、変化したとすればそれはどのようなものであったか、を明らかにすることは、内容的類型学の理論にとって大きな意味をもつことになる。

§4 すでに述べたように内容的類型学は類型の基本的な軸を主述関係に求め⁶、その類別によって各レベルの体系が規定されたとするが、このような基本的原理によって規定され、これと論理的な整合性を保っている現象を「包含事象」implication ロ implikacija と称する。一方たとえば能格言語類型に属する言語群には、しばしば包含事象に随伴して認められるにも関わらず、必ずしも基本原理からは論理的に導くことのできない現象が存在する。これを「随伴事象」frequentaly ロ frekventalija という。随伴事象は歴史的に先行する言語類型の包含事象が、類型の変化にともなってその論理的整合性を失ったものか、あるいは次の発展段階への萌芽的現象であると考えられる。

活格言語類型と能格言語類型

§5 活格言語は比較的最近にいたって独立の類型と認められるようになったもので⁷、以前には能格言語の一変種としてこれにふくめられていた。やがて能格言語の研究が進展するにつれ、漸次能格言語の起源ないし発生という、いわば通時的な問題が意識にのぼってきた。これは能格言語と考えられていたものの内部において発達しつつあるとみられる現象、ならびに衰退しつつあると考えられる現象の存在が、しだいに明らかになってきたことと、密接に関連している。

⁵ ペルシャ語のアオリスト時称に能格構文がみられ、またシナ、ネパーリ、パハリ等の方言にはすべての時称において能格構文がみられるという。cf. G. A. Klimov (1973).

⁶ ガムクレリゼ等は、活格言語は具体的な名詞において生物と非生物の区別を行なうことを基本にするのに対し、能格言語および対格言語は、より抽象的な動詞における自動詞と他動詞の対立を軸に据えたと主張する。しかし少なくとも能格言語の基底を自動詞と他動詞の対立であるとするには同意しがたい。cf. op. cit. p. 314. 一方能格言語における自動詞と他動詞という名称が、仮の物にすぎないとする研究者もいるという。G. Dumezil (1932), *Études comparatives sur les langues caucasiennes du Nord-Ouest (Morphologie)*, (Paris), pp. 49, 156.

⁷ G. A. Klimov (1977).

たとえば自動・他動の意義が未分化であり、場合によってそのいずれにもなりうるところの瀰漫性動詞 *diffused verbs* の減少、いわゆる情緒構文 *affective construction* の衰退、有生と無生という名詞のクラスの消失ないし形式化、絶対格動詞 *absolute verbs* と能格動詞 *ergative verbs* との語彙的対立の弱化、一人称複数における包含形 *inclusive forms* と排外形 *exclusive forms* の対立の消失などが一方に認められる。他方では *verba habendi* のように典型的な主語・目的語関係を表わす動詞や連辞の発生が指摘されている。

§6 このように能格言語の内部で発達傾向をみせる現象と衰退の兆しを示す現象が存在するとすれば、前者が能格言語の将来に、後者がその過去に関係するであろうことは、想像にかたくない。

これらの研究の中から、従来能格言語、もしくは能格言語の一変種として扱われていた言語の中に、これとは異なる言語類型に属するとすべきものがふくまれているという認識が生じてきた。これを巡っては種々の論議が存在したが、能格言語において衰退しつつあるのが、多く随伴事象に属する現象であることに着目し、その性質を検討することから、この種の言語が、行為を意味するかあるいは状態ないし性質を示すかに従って述語を類別することを、その構成原理としているという考えに到着した。したがってこの種の言語においては、名詞も行為に参与できるか否かによって区別されることになる。有生無生の別である。

§7 したがってここではまた名詞が形態をもちうる場合には、行為に主体的に参与する対象を表わす有徴的な格と、それ以外の対象を表わすことを原則とする無徴的な格を区別することになる。前者が活格 *active case*、後者が絶対格 *absolute case* である⁸。用語の統一という点からすればこれに対応する動詞は活格動詞 *active verbs* と絶対格動詞 *absolute verbs* ということになるが、前者に対しては行為動詞、後者に対しては状態動詞という呼称が用いられるのが一般的である。

対格言語においては自動詞と対格をともなう他動詞とが、また能格言語においては絶対格動詞と能格をともなう能格動詞とが、文法範疇として対立していた。能格言語におけるこの対立は、機能的には行為をより能動的性格の強いものと、さほど強くないものとに分類するものであると考えられる。したがって目的語をともなうものはこの前者に、状態を表わすものはこの後者に属することとなる。

この結果能格動詞は対格言語でいう他動詞の大部分と自動詞の若干をふくみ、他方絶対格動詞は自動詞の大部分をふくむという点で、対格言語の動詞の類別と、一定の重なりを示すことになる。

これに対して活格言語の場合には、行為を有生に属するものか、あるいは無生に属する

⁸ *ibid.*

ものかに従って類別を行なうことから、対格言語の自動詞と他動詞の大部分は行為動詞に包含され、自動詞に属する状態動詞は名詞述語や形容詞述語に相当するものとともに、状態動詞を構成することになる。この点で活格言語は能格および対格言語の双方に対立する言語類型であるといえる⁹。

§8 活格言語はすでに述べたように事象を有生と無生に分類するから、動物と植物はともに有生に属する。したがってこの類型に属する言語においてこの両者に共通する語彙ないし表現が多いのは、このタイプの包含事象である。たとえば、「血」と「樹液」、「耳」と「葉」のような場合に加えて「殺す」と「伐採する」、「泣く」と「樹液が滲出する」のような場合である¹⁰。

またこれとは逆に同一の行為が有生に関するものか無生に関するものかによって語彙を異にするのも、同じく活格言語の包含事象である¹¹。

さらに動詞のクラスには行為動詞と状態動詞の別しか存在しないことによって、行為動詞に属する他動詞と自動詞の類別が存在しないのも、また当然である。たとえば「死ぬ」と「殺す」、「燃える」と「焼く」、「横たわる」と「置く」、「行く」と「運ぶ」のような場合である¹²。これと関連して活格言語においては能格および対格言語とは異なって、目的語の存在は選択的なものにすぎないといえる。

§9 活格言語においては、以上のような動詞の区別に対応して活格と不活格の2系列の人称接辞をもつのを原則とする¹³。そのさい、活格系列の接辞は当然ながら行為動詞の論理的な主語と一致するが、不活格系列の接辞は状態動詞の論理的主語と一致するほかに、行為動詞に属する論理的他動詞の論理的目語とも一致する。この類型は、行為を有生に

⁹ クリモフによれば、現在活格言語類型に属するとされるものは、第1に北米の Nadene 語族に属するとされる Haida, Tlingit, Eyak, この語族の Athabaskan 語派に属する Navaho, Apache, Chiricahua, Hupa, Mattole, Sargi, Chipevya, Karyer 等の諸言語、Dakota, Assiniboine, Ponca, Tutelo, Hidatsa, Crow, Ofo, Iowa, Catawba 等の諸言語、Muskogean 語族に属する Muskogee, Creek, Choctaw, Hichiti, Coasati 等の言語、Iroquoian 語族に属する Mohawk, Oneida, Seneca, Onondaga, Huron, Cherokee 等の諸言語であり、同じく北米の Yuchi 言語もこれに属するという。第2には南米のブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ペルーに分布する Tupi, Guarani, Kaiwa, Kamayura, Aweti, Kokama, Omagua, Munduruku, Siriono, Yuruna, Akire, Turaru, Ramarama, Monde, Purubora 等の言語がある。このほかインドネシアおよびメラネシアの諸言語、フィリッピン島のタガログ語、ミンダナオ島のダバオの北部に分布する Dibabawon、オーストラリアのアボリジンの言語などもこれに属するという。古代の言語では印欧祖語の外、ウラルト語、エラム語等の名があげられる。

¹⁰ これはとくに Tupi-Guarani 語族、Nadene 語族に著しいという。cf. G. A. Klimov (1977), p. 112.

¹¹ たとえばナヴァホでは生物に関する ti「存在する」、tiⁿ「横たわっている」、-hááh, -ya「動く」、yóól「吹く」などには、無生物の tél, 'á, kéés, t'síih がそれぞれ対応するという。G. A. Klimov (1977), p. 114. 英語の場合、たとえば to swim に対する to float のようなものも認められるが少数である。ロシア語の場合にはたとえば padat'/ valit'sja「倒れる」、lezhat'/ valjat'sja「横たわっている」、dut'/ vejat'「吹く」、tonut'/ pogruzhat'sja「水に沈む」、obstupat'/ okuruzhat'「取り囲む」、byt' molodym「若い」/byt' novym「新しい」のようなものがみられる。日本語の「ある」と「居る」もここに属せしめるべきであろう。

¹² cf. G. A. Klimov (1977), p. 85.

¹³ たとえばグアラニ語における人称接辞は次のようになるという。

属するものであるか否かによって類別すること、換言すれば対象を行為に積極的主体的に参与するか否かによって分類することをその原則としているのであるから、他動詞的行為の論理的目的語として立つときは、有生のものであっても、行為への参与という契機をもたないものとしてとらえられることになるのである。包含事象となる所以である。一方能格言語は行為をより能動性の高いものとそうでないものとに分類するから、能動性の低い絶対格動詞の論理的主語を表わす接辞もまた、能格動詞の論理的目的語と一致する。この構文の特徴に関して活格言語と能格言語はともに対格言語に対立している。

§10 活格言語においては、他動詞と自動詞の区別が存在しないこと¹⁴、状態動詞には論理的他動詞がふくまれないことによって、*verba habendi* はその存在の根拠をもたない¹⁵。言語によってはたとえばナヴァホの *n-tcij xóló* 「おまえの薪がある」のように所有の接辞をともなつた名詞と組みあわせる場合、トゥピ語のように *hú-ikú* 「存在する」に随伴を示す要素 *-r-* を加えた *hú-r-ikú* 「共にある」のような表現をもつ場合がみられるという。また状態動詞は事物の性質、形状を表わすものであることから形容詞と形態的に未分化であり、したがって両者が独立の品詞としては存在しなかった時期があったことが推定できる。

§11 一方有生と深く関わっているが不随意的な行為や状態を表わすものは、その意義からして有徴的な活格を取ることができない。このそれ自身に内包する矛盾によって、この種の動詞は言語によってあるいは行為動詞に、あるいは状態動詞に帰属させられることになるが、場合によっては活性とも不活性とも異なる、第3の系列の接辞によって表わされることもあるという¹⁶。

数	人称	活 格	不活格
単	1	a-	še-
	2	re-	nde-
	3	o-	i-
複	1 (包 含)	ja-	ñande-
	1 (排 外)	ro-	ore-
	2	pe-	pende-
	3	o-	i-
例)	活格動詞		不活格動詞
	a-me?e	「私は与える」	
	re-me?e	「お前は与える」	
	re-wewe	「お前は飛ぶ」	
	o-wewe	「彼は飛ぶ」	
	še-pete	「私を打つ」	še-miri
	nde-pete	「お前を打つ」	nde-miri
	i-pete	「彼を打つ」	i-miri
			「私は控え目だ」
			「お前は控え目だ」
			「彼は控え目だ」

グアラニ語では接辞はこのように1つしかつけないが、たとえばダコタ語の *wa-kaška* 「私は縛る」、*ya-kaška* 「お前は縛る」に対する *wa-ya-kaška* 「私はお前を縛る」のように、言語によっては両系列の接辞を同時に取ることのできるものもあるという。cf. G. A. Klimov (1977).

¹⁴したがって所有動詞と存在動詞の区別もない。

¹⁵*verba habendi* は他動詞であり、かつ状態動詞である。

¹⁶スー語族、ムスコギ語族およびイロコイ語族にこのような言語が多いといわれる。

ここで興味のあるのは、たとえばアシニボインの言語では wayáka 「見える」、iyúka 「思われる」、awáyaka 「油断しない」等の動詞がこれに属するとされていることである。一般にはこのほかたとえば「聞える」、「知る」、「覚えている」、「忘れる」、「気に入る」、「愛する」、「欲する」、「必要とする」、「憎む」、「恐れる」、「そねむ」、「憐れむ」、「笑う」、「考える」、「似合う」等の意義をもつ語彙がこれに属するという¹⁷。これらの多くのものは、能格言語の随伴事象とされるいわゆる情緒動詞 *verba affectuum* に属するものと重なっている。情緒構文は絶対格の指標が主語の位置に立ち、能格系列の指標が目的語の位置にたつという点で能格構文と主語・目的語の位置が逆転しているものである¹⁸。このことから考えれば、能格言語における情緒動詞は、活格言語の不随意動詞のみをまとめて解釈し直したものと推定される。

§12 活格言語は対象を本来的に活格をとりえない無生と、活格を取りうる有生とに分かつが、有生名詞は行為との関係によって活格にも不活格にも立ちうる。したがって1人称複数において対話者が話者とともに行為に対して活格にたつ関係にあるか否かは、重要な問題となる。1人称複数が対話者をふくむ「包含形」*inclusive forms* とこれをふくまない「排外形」*exclusive forms* とに区別されるのは、このためである。したがってこれも活格言語の包含事象である¹⁹。

§13 能格言語の場合、すでに述べたように論理的目的語をとまなう能格動詞とこれをとまなわない絶対格動詞とを区別するが、これは活格言語における行為動詞を論理的目的語をとまなうものともまなわないものに分け、後者が状態動詞とともに絶対格動詞に帰属するかたちで、再編成を行なった結果である。このかぎりでは両者の対立は対格言語の他動詞と自動詞の区別に等しいが、能格言語は能格動詞が論理的な主語として能格にたつ名詞をとり、論理的な目的語として絶対格動詞の論理的な主語と同じ絶対格をとる、という点で、対格言語とは異なり、むしろ活格言語に近い²⁰。

¹⁷ギリシア語、ラテン語等でこれに属するものがしばしば *verba deponentia* であることは興味深い。ロシア語でも、たとえば *bojat'sja* 「恐れる」のように *reflexiva tantum* であるものがこれに属する。

¹⁸このためアメリカの言語学では情緒構文は倒置をとまなう「他動詞」の構文の一種と考えられているという。たとえば北米アルゴンキン語族に属する Ojibwa 語では「他動詞構文」に属する *ke-nōntō-n* 「お前を・聞く・私は」に対して情緒構文ではたとえば *ne-nōntuw-ā* 「私に・聞こえる・彼が」、*ke-nōn-tuw-ā* 「お前に・聞こえる・彼が」のようになるという。

¹⁹古くは活格言語であるとされる印欧祖語は、人称代名詞の一人称に **uei*(**ues*), Skr. *vayām*, Av. *vaēm* < **vayam*, Got. *weis*, Hitt. *ueš*, Toch. B. *wes* と **mes*, Lit. *mēs*, Sl. *my*, Arm. *mek* の2形を有していた。ガムクレリゼ等は **uei*- の形が2人称複数形と **u*- を共有している (cf. Sl. *vy*, Lat. *uos*) ことからこれを包含形であろうと推定している。この形は後に Lit. *vè-du*, Sl. *vě*, Got. *wait* のように包含形双数と再解釈されるに至ったという。cf. Prokosch, E. (1939), *A Comparative Germanic Grammar* (Philadelphia); Leibert, G. (1957), *Die indoeuropäischen Personalpronomina und die Laryngalthorie. Ein Beitrag zur Erforschung der Pronominalbildung* (Lund)。

²⁰したがって対格言語では、たとえば (人が殺す) + (鹿を) から (鹿が) + (人に殺される) を導くことは可能であるが、能格言語の (人が) + (鹿を殺す) からは、第1次のシンタグラマを破壊することなしに被動形を導くことができない。能動・被動の対立は、したがって対格言語の包含事象なのである。トルベツコイは対格言

このような構成原理の変更によって、能格言語は再解釈できなかった活格言語の包含事象を、随伴事象として受け継ぐことになる。

§14 以上述べてきたように、文の構成は接辞を動詞述語に付加することによって示されるのが基本であり、文中の名詞的要素はこれを敷衍して2次的に付加されるのが普通である。このことから能格言語においては、動詞が文の中心として、強い述語性をもっていることが、うかがわれる。活格言語の場合もこれと同様であり、むしろこの点に関してさらに著しいとさえいえよう。このような強い述語性は言語の段階を遡るにつれさらに顕著になり、ついには文そのものが述語となる場合もありうると予想される。メシチャニノフの報告するところによれば、ギリヤークの言語においては、述語を示す接辞 *-di* が存在し、たとえば *pil-(l)adyf ur-d'* 「大きい・家・よい・述語」= 「大きい家はよい」、*ur-ladyf pil-d'* 「よい・家、大きい・述語」= 「よい家は大きい」のように用いられるという。この接辞は「大きい」あるいは「よい」の部分のみを述語化するというよりは、むしろ文全体を述語化すると考えるべきであろう²¹。

§15 このような言語においては、名詞と動詞がまだ十分には分離しておらず、形態的にきわめて近い場合もある。たとえばアレウト語においては *ula-n'* 「私の家」、*ula-n* 「君の家」に対する *siku-n'* 「私は行なう」、*siku-n* 「君は行なう」が存在するという²²。これがさらに発展すれば、述語の位置にあるものはすべて変化することになる。たとえばネネツ語では *khasava* 「男」、*ngarka* 「大きい」、*nu* 「立つ」について、*khasava-m* 「私は男だ」、*ngarka-n* 「君は大きい」、*nu-nu-φ* 「彼は立つ」のような表現が存在する。時称もまた接辞によって表わされ、たとえば過去は要素 *-si* によって、*sjurbi-m-zì* 「私は走った」、*ngarka-n-a-si* 「彼は大きかった」のようなかたちをとる²³。

これらのことからこの種の言語においては論理的な主語あるいは目的語はいずれも述語に緊密に統合され、第1次のシンタグマを構成すると考えられる。これに対し活格および能格言語の場合には、「不活格+動詞述語」、「絶対格+動詞述語」が第1次のシンタグマを構成し、これに活格あるいは能格にたつ成分が付加されるか否かによって、動詞述語の類別が行なわれる。これらの言語において接辞がしばしば論理的な目的語と一致する（いわゆる対象活用）のはこのためであると考えられる。対格言語の場合には、「主格+動詞述

語の場合には目的語が「規定的シンタグマ」*syntagme determinatif* であり、行為者+動詞が「述語的シンタグマ」*syntagme predicatif* であるのに対して、能格言語の場合には規定的シンタグマは行為者であり、目的語+動詞が述語的シンタグマであるとしている。これはこの間の事情を正しく言いあてたものといえよう。

²¹I. I. Meshchaninov (1982), *Glagol*, (Leningrad), p. 35. この言語ではたとえば「私はよく暮らしている」というとき、*n'i khum-d' ur-d'* 「私、生きる・述語、よい・述語」のように表わすという。この場合にも2つの文が入子構造をもって用いられていると考えられる。

²²活格言語に広く分布している所有の接辞はこのような段階にある言語の包含事象であるのかもしれない。

²³I. I. Meshchaninov, *op. cit.*

語」が第1次のシンタグマを形成し、対格に立つ要素の有無によって述語の類別が行なわれる。主格活用が用いられる所以である。

ロシア語

§16 ロシア語の場合、上述した活格言語の包含事象に類似するものがしばしば認められる。これらの多くは古代・中世ロシア語にまったく存在しなかったか、存在してもきわめて微弱なものにすぎなかった。

たとえば古ロシア語に存在していた連辞が消失したのもそのひとつである²⁴。また所有関係は現代語において *U menja kniga* 「私の所に本がある」 = 「私は本を持っている」のように存在動詞によって表現されるようになったが、これは古ロシア語のみならずチェコ語、ポーランド語、ブルガリア語等の他のスラヴ語が *verba habendi* による表現を一般化しているのとは、きわだった対照を示している。

一人称複数においてロシア語では *ja i ty* 「私と君」、*my i vy* 「私と君達」のような表現は、不可能ではないにせよ稀であり、*my s toboj*, *my s vami* のように前置詞 *s(cum)* による構文を用いるのを通例とするが、これも活格言語の内包形を想起させる。

さらにスラヴ語に多少の変異をともなって広く認められるいわゆる活動体と不活動体の区別も、活格言語の有生と無生の区別を連想させる。

§17 このような類似は、ひとつひとつは偶然的なもののようにもみえるが、拾い集めてみれば、証明の手だてこそまだ存在しないものの、やはり何かそこに一定の底流の存在を感じさせる。それはそれとして、構造の立場からロシア語を観察すれば、これが対格言語の枠内であるにせよ、能格言語あるいは活格言語におけるように、述語機能を強化する方向に推移してきたと結論される。以下はこの点についての論述である。

形容詞短語尾形の成立

§18 形容詞は印欧語の場合、名詞とほとんど同じであり、わずかに異なるところは、形容詞が相異なる性にわたる変化を行なうことにある。いわゆる *motio* の存在である。このかたちは現在の短語尾形に連なっている。これに対しいわゆる長語尾形は、たとえば、*dobrŭ-jŭ > dobryj*, *dobra-ja > dobraja*, *dobro-je > dobroje* 「善良な」のように、本来の形容詞（名詞形）に承前代名詞 *anaphorique* の *jŭ, ja, je* 「それ」を付加することによって成立した。その後名詞形は専ら述語として用いられるようになり、それにともなって主格以外の格形を喪失して短語尾形が成立することになった²⁵。

²⁴ 過去において *byl*, *byla* etc., 未来において *буду*, *будеш'* etc. が用いられるのは、主として時制を表わすために過ぎない。

²⁵ 短語尾形が述語に局限されるにいたった理由については拙論 *O funkcijakh polnoj i kratkoj form imen prilagatel'nykh drevnerusskogo jazyka*, 『言語研究』第41号(1962) 参照。

これとならんでロシア語では、連辞 *esmi*+能動完了分詞第2形によって構成されたかつての完了形も、連辞の脱落によって人称変化を失った。このことによって動詞の過去形は、代名詞主語を人称接辞とみなせば、たとえば *ja-chital-φ* 「私・読んだ・男性」、*ja-chital-a* 「私・読んだ・女性」のような形容詞短語尾形の場合と平行する形式を獲得するにいった。これは連辞の喪失とあいまって、形容詞が活格言語における状態動詞にきわめて近い機能をもつ形式を獲得したことを意味する。すなわち類型学的観点からすれば、短語尾形の成立の意味は、形容詞の「状態動詞化」という点に求められるのである。*ja-dobr-φ* 「私・善い・男性」=「私（男性）は善い」、*ja-dobr-a* 「私・善い・女性」=「私（女性）は善い」のようなかたちである。

人称変化の衰退

§19 もし動詞の現在変化においても人称の区別が失われたならば、形容詞短語尾形は、活格言語の状態動詞のように形式的に行動動詞に対立する状態動詞に転化することになるだろう。

これに対してチェコ語では今日でも形容詞の場合のみならず、動詞過去形の場合にもたとえば *nesl jsem* 「私（男性）は運んだ」、*nesla jsi* 「君（女性）は運んだ」のように連辞部分を保存し、主語と動詞述語とは性、数のみならず人称においても緊密に結びついている。さらにポーランド語では、たとえば *niosł-e-m* 「私（男性）は運んだ」、*niosł-a-m* 「私（女性）は運んだ」のように連辞を能動完了分詞第2形に融合させることにより、新たに人称、性、数を統合的に表示するようになり、屈折語的性格を強めた。したがってロシア語はこれらの言語とは逆の方向に発展しているといえることができる。

§20 これらの事実は、ロシア語の場合対格言語に本来的な主語と述語との緊密な結びつきが弱まり、文中における述語の地位の相対的な強化がもたらされたことを示している。連辞の喪失それ自身も、このこととの内的関連において理解されなければならぬ。

形容詞短語尾形が強い述語的性格を示していることは、状況語あるいは不定詞をとともなうときにこの形を選択することが多いという事実にも現われている。たとえば、

V ljubvi, kak v zlobe, ver', Tamara, Ja neizmenen i velik. (Lermontov)

「タマールよ、偽りでなく私は悪意と同じく愛においても忠実で偉大なのだ。」²⁶

ポーランド語あるいはチェコ語においても短語尾形にはロシア語と平行する用法がみられるが²⁷、連辞を保存するこれらの言語においては、短語尾形の使用を限定しようとする

²⁶ AN SSSR (1960), *Grammatika russkogo jazyka*, 2, (Moskva), p. 450. ボラスおよびクリスチャンは、「前置詞をとともなうか或は名詞または代名詞の斜格を支配する形容詞短語尾形は、その意義において同じ語根から作られる動詞に等しい」として、*Ja soglasen s nim.* = *Ja soglashajus' s nim.* 「私は彼に同意する」のような例をあげている。cf. F. M. Borras, R. F. Christian (1971), *Russian Syntax*, 2. ed., (Oxford), p. 83.

²⁷ たとえばチェコ語の *Ukázal se toho hoden* 「彼は自分がそれにふさわしい事を示した」に対するより汎時称的な長語尾形 *Ukázal se hodný* 「彼は自分が立派な人間である事を示した」のような場合である。Fr.

強い傾向が認められ、しかもこの傾向はチェコ語よりもポーランド語に著しいといわれる²⁸。

§21 古スラヴ語あるいは古ロシア語では、印欧語の古い時代から継承した屈折語的な動詞組織を保存していた。このうち現在形のほかアオリスト形、未完了過去形は単一形であったが、完了系諸時称は回説的に表現されていた。この完了系諸時称に用いられていた能動完了分詞第2形がアオリストおよび未完了過去の領域にその使用を拡大することによって、すでにみたような過去形の成立と人称変化の衰退が招来されたのである。

このような能動完了分詞第2形の過去時称への拡大は、これがアスペクトを異にするアオリストと未完了過去の両者を代替することを意味し、語形変化によってアスペクトを示すことを不可能にするから、語幹によるアスペクトの対立の表現の発達が必要になる。これに対して過去に単純時称を保存しているブルガリア語では、アスペクトの対立はロシア語ほど明確でない。このことからアスペクトの発達もまた、人称形の衰退と深く関わっていたことが知られるのである。

名詞類の述語性の強化

§22 連辞の脱落は、他方では述語の位置にたつ語の述語性の強化を前提としているといえる。この意味で名詞が述語となる場合にも、その述語としての機能は連辞の存在する言語におけるより強いと思われる。事実人称代名詞を単なる人称接辞とみなせば、人称代名詞を主語とし、名詞を述語とする文は、たとえば *ja-student* 「私は学生だ」 のようになり、すでに述べたネネツ語の *khasava-m* 「私は男だ」 のようなかたちと本質的に変わるところがない。

さらにスラヴ諸語では、被動は連辞 *byt'* に *-no-*, *-to-* を接尾辞とするいわゆる被動形動詞過去の短語尾形を付加することによって、回説的に表現されるが、ロシア語の場合、その一般的傾向に従って連辞の部分が脱落し、形容詞あるいは名詞述語と同じ形式をもつことになった。

主述関係の弱化と非人称形の成立

§23 以上みたような人称変化の衰退の傾向は、主語と述語の緊密な関係を弱め、述語の相対的独立性を高める方向に働くと考えられる。これがその極限に達すれば、述語は完全に主語から独立するであろう。非人称形である。ロシア語は人称形と対立する非人称形を

Trávníček (1951), *Mluvnice spisovné češtiny*, č. 2, (Praha), p. 1098.

²⁸ チェコ語において短語尾形が人物に用いられることがしばしばみられるのに対し、動物やものを表わす場合には、ほとんどすべて長語尾形が使用されるのは、著しい現象である。たとえば *Otec je stár*. 「父は老いている」、*Strom je starý*. 「木は老いている」、*Ten člověk je klidný*. 「その人は物静かだ」、*Moře je klidné*. 「海は静かだ」、などである。Fr. Trávníček, *op. cit.*, p. 1099; Fr. Kopečný (1962), *Základy české skladby*, (Praha), p. 181 & seq.

大きく発達させてきた言語であると思われるが、その理由もまたこのようなところに求めることができよう。またこの非人称形の意味的特徴は不随意性を表わすところにあると考えられるが、そうとすればこれは活格言語類型における動詞の類別とその原理において著しく似通ったものとなる。

§24 述語性の強い形容詞短語尾形は周知のように非人称形として独立して用いられることも多いが、この場合とくに興味のあるのは、この種の述語が多く与格に立つ補語をとまなうことである。いま仮に人称代名詞の与格形を主格形と異なる系列の人称接辞と考えれば、この種の述語はたとえば *mne-kholodno* 「私は寒い」、*tebe-kholodno* 「お前は寒い」、*nam-bylo-kholodno* 「我々は寒かった」のようになる。そうすればこれらの「接辞」は形式的にも機能的にもスー語族のアシニボイン語やイロコイ語族のセネカ語などにおける不随意行為を表わす接辞の系列と平行することになる。

また意義的に能格言語の情緒動詞にあたる *vidno* 「見える」、*slyshno* 「聞こえる」はたとえば *mne-vidno goru* 「私には山が見える」、*nam-slyshno pesnju* 「我々には歌が聞こえる」のように論理的な補語を取ることもできる。

そのほかヴィノグラードフのいう、いわゆる *kategorija sostojanija* に属する *nado* 「ねばならぬ」、*nel'zja* 「できない、いけない」、*mozžno* 「できる」、*nuzhno* 「必要である」なども、意味上の主語を表わすとされる与格にたつ主体にとって、不随意的な事態を表わすという特徴をもっている。

§25 被動形動詞過去の短語尾形も、非人称の形をとって独立の述語となるが、この場合にも述語性はきわめて高く、また与格にたつ主体にとって不随意的な状態を表わす。たとえば、

Porucheno ej bylo schët vest'.

「彼女に勘定が任された。」

この種の述語は非人称であって主語と関係がないために、ときとして被動の意義が薄れ、ほとんど動詞述語に近い述語性をもつことがある。たとえば、

U menja skazano ...sdelano.

「私は言ったことは必ずやる。」²⁹

このような述語性の高さは、とくに口語においてこのかたちに目的語をとらしめることもある。たとえば、

U rebjat nalovleno ryby.

「子供達にはたくさんの魚が獲れた。」³⁰

²⁹ これは行為を不随意的なものとして述べることによって一般性を獲得し、強い表現となる。

³⁰ ポーランド語ではこの種の用法がすでに規範的地位を得ているが、これを理論的にどう解釈するかについては、まだ詳らかにしない。

さらに口語において自動詞から派生する被動形動詞短語尾の非人称形が、とくに俚諺に認められるが、これも不随意性を媒介にして一般的普遍性を獲得したものであると思われる。たとえば、

V devkakh sizheno, plakano, zamuzh khozheno, vyto.

「お嫁に行けないのは泣きたいことだけど、行けば行っただで呻く(程苦しい)。」

定動詞の非人称形

§26 述語の主語からの独立は、動詞の場合には定動詞の非人称形となって現われるが、これにはいくつかのグループがある。

そのひとつは天候などの自然現象に関するものである。たとえば Veet 「風が吹く」、Svetleet 「明るくなる」、Morosit 「雨がそぼ降る」のようなものである。これらはいずれも人為の及ばない現象を指すという意味で、不随意的な行為といえることができる。

第2のグループとして人の心理的あるいは生理的状态を示すものがある。これもまた人の意志によらない不随意的行為であるが、この場合人物は与格でなく「u + 生格」で表わされる。たとえば、

V ushakh u gostja zatreshchalo.

「客の耳の中でパチパチと音がした。」

第3のグループに属するのは、「匂う」、「吹いてくる」のような、感覚に関わるものである。たとえば、

Iz-za Volgi s lugov tsvetami pakhnet.

「ヴォルガの向こうの草原から花の匂いがする。」

S morja veet svezhest'ju.

「海から心地よい風がふいている。」

これは一方では自然現象であるが、他方人の感覚に関わるものであり、第1と第2のグループの中間にあるといえることができる。

§27 第4グループに属するのは、非人称に用いられる他動詞の構文であり、目的語をともなっている。たとえば、

V odnu minutu dorogu zaneslo.

「一瞬のうちに道が塞がった。」(＜「一瞬のうちに(それが)道を塞いだ。」)

これを被動構文によって V odnu minutu doroga zanesena. 「一瞬のうちに道が塞がれた」とすれば、自然現象ないしはこれに近い不随意的行為であるというニュアンスが失われ、事実の単なる叙述と化してしまうであろう。このようなことが起こるのは、ひとえに人称構文では主語と述語の関係が相対的に密であり、動詞述語の述語的性格が弱化するためであると思われる。上述の構文のもつ不随意的性格は、たとえば Ego znobit 「彼は悪寒がする」、Eë trjasët 「彼女は震えている」のような例からも明らかである。

§28 この構文はまたしばしば造格補語をとる。たとえば、

Saraj zazhglo molnjej.

「納屋を・それが焼いた・雷によって」＝「納屋が雷によって焼けた」

1980年版のアカデミー文法は、この例文の saraj について、これが Molnija zazhgla saraj. 「雷が納屋を焼いた」という構文における、行為を被った対象としての「納屋」と、Saraj zagorelsja ot molnii. 「納屋が雷が原因で燃え出した」という事態の結果としての状態のにない手の両方を表わしており、この意味で彌漫的 diffuse であるという。しかしそのいずれの場合にも、この構文の意味的特徴をなす、人為を越えた自然現象というニュアンスが失われてしまう。

この構文はいわゆる能格構文とかたちがよく似ているところから、しばしば能格の例として引用されることが多い。確かにこの構文は「目的語＋動詞述語」が第1次のシンタグマを形成し、これを造格に立つ名詞が2次的に修飾するという形式を有しており、その限りでは能格言語の能格構文に類似している。またそのシンタグマの構造から、これが相的な対立を論理的にもちえないのも当然である。

しかし造格に立つ名詞の指示する対象は、主体的積極的に行為に参加する人もしくは生物でなく、自然現象、とくにその過程を表わすものにすぎず、したがってこれは能格構文の定義に反している。またこの構文の意味的特徴も、能格構文とはまったく異なっている。

§29 再帰動詞の非人称形も、与格をともなって不随意的行為を表わす。たとえば、

Mne nikak ne spitsja.

「私はどうしても眠れない。」

動詞の表わす不随意的性格は、とくに次のような場合に顕著である。すなわち

Kak vam sluzhilos' u Vlasova?

「ヴラーソフのもとでの勤めはどうでしたか（ヴラーソフのもとで貴方にはそれがどう勤められましたか）。」

これは Kak vy sluzhili u Vlasova? 「貴方はヴラーソフのもとでどう勤めましたか」とはまったく異なって、勤務がどう感じられたかを問うているのである。

不定法文の発達

§30 すでに述べたようにロシア語は述語の「述語性」を強め、主語との関係を相対的に弱めつつあると考えられる。ロシア語においていわゆる不定法文の広汎な発達が認められるのも、このような一般的傾向と軌を一にしているとみられる。これは与格にたつ補語を取り、したがって形式的には非人称構文に等しい。これはまた意義的には当為、可能、必要などの種々の様態性を表現するが、不可避性を表わす場合には byt' 「ある、存在する」しか用いられないという語彙的制約があるほかは、おおむね自由である。たとえば、

Tradicijam novym byt'!

「新しい伝統が必ず起こる。」

Syna ne sra^{va}nit' s otcom.

「息子を父と較べることはできない。」

これらはいずれも与格に立つ主体にとって随意的ではない。もともと様態性は、主体の随意性、自発性を制限するものなのである。

§31 これに対して対格言語としての性格を強く維持している言語においては、不定法文はきわめて限られた使用の範囲しかもっていない。たとえばチェコ語では *platit* 「(私は) 支払いたい」あるいは *sednout!* 「座れ」のような場合のほかは、たとえば条件を表わす場合の、

Já mít peníze, tak to koupím.

「私がお金を持っていたら、それを買うのだが。」

あるいは稀に、

Tohle slyšet Anna, zapoměla na všechno.

「アンナはこれを聞くや否や、すべてを忘れてしまった。」

のような場合に限られる。これらの例の *Ja*, *Anna* 等が主格のまま不定法 *mít* 「持つ」、*slyšet* 「聞く」の主語になっているのは、形式的には明らかな破格であり、本来はこれが不定法文であったことを示している。

英語の場合これにあたるのは *be to* の構文であるが、明らかなように英語ではこの種の不定法を *be* 動詞に従属させ、人称構文に組み込んでしまっているのである。

結 語

上述したことから、ロシア語は主語と述語の密接な連関を弱め、述語の役割を強化する方向に進んできたといえることができる。その中でロシア語は動詞に加えて形容詞、被動形動詞あるいは名詞のような名詞類についても、その述語性を強め、形式的にも動詞に近づけつつある。それにもかかわらず、主語と述語の関係はまだ十分に強固であり、全体として対格言語の枠を越えることはない。

このような対格言語の制約は、非人称形の分野では弱められるから、述語の有する中心的な役割の強化は比較的制限されることが少なく、著しい発展をとげつつある。その結果ロシア語においては、不随意性を意義的特徴とする非人称形は、人称形に対立する大きなカテゴリーになりつつあるといえる。もしそうだとすれば非人称形と人称形のこのような対立は、対格言語という制約の中で述語の役割の強化が到達したひとつの形態であるといえることができよう。したがってこれが活格言語あるいは能格言語とその意味的構造的な現われ方において異なるのも当然である。

しかし述語の役割の強化という観点からすれば、ロシア語は能格あるいは活格言語類型と共通するものを有しており、その限りではこれに類似する現象がみられるのも、あえて

怪しむには足らない。このようなロシア語の発展が、活格言語ないし能格言語の影響によるものなのか、あるいは特異な発展の結果これらの言語類型に類似する現象が生じたのかについては、現在のところ詳らかにしない。しかし古ロシア語の言語事実と比較すれば、このような傾向が生じたのは、比較的新しいことであるといえる。

参 考 文 献

- Borras, F. M., Christian, F. M. (1971), *Russian Syntax*, 2nd (ed.) (Oxford).
- Dumézil, G. (1932), *Étude comparative sur les langues caucasiennes du Nord-Ouest (Morphologie)* (Paris).
- Kopečný, Fr. (1962), *Základy české skladby* (Praha).
- Liebart, G. (1957), "Die indoeuropäischen Personal-pronomina und die Laryngaltheorie", *Ein Beitrag zur Erforschung der Pronominalbildung* (Lund).
- Trávníček, Fr. (1951), *Mluvnice spisovné češtiny*, č. 2. (Praha).
- Prokosche, A. (1939), *Comparative Germanic Grammar* (Philadelphia).
- Гамкрелидзе, Т. В., Иванов, Вяч. Вс. (1984), *Индоевропейский язык и индоевропейцы*, 1-2. (Тбилиси).
- Климов, Г. А. (1973), *Очерк общей теории эргативности* (М.).
- (1977), *Типология языков активного строя* (М.).
- Мещанинов, И. И. (1982), *Глагол* (Ленинград).
- Ямагути, И. (1962), О Функциях полной и краткой форм имен прилагательных древнерусского языка, 『言語研究』第41号.